



株式会社オプトラン取締役専務執行役員の高橋俊典です。

これから2020年度12月期第1四半期の決算説明をさせていただきます。



2020年12月期 第1四半期決算の概要

- 決算ハイライト
- 売上高（2020・1Q）
- 受注高・受注残高（2020・1Q）
- 営業利益（2020・1Q）
- 財務の状況
- 業績見通し

決算ハイライト



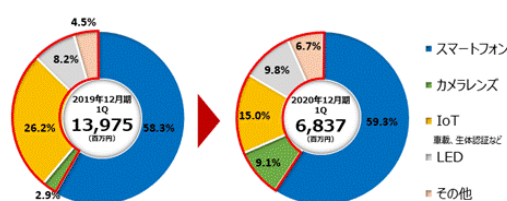
- 1Qの新型コロナウイルスの影響は最小限に留まる。上海・台湾工場とも、現在、正常稼働に復帰。
- 2019年度で北米スマートフォンメーカー売上が完了、売上減の要因となった。ただし、2020年1Qは新たな受注を獲得し、本年後半の売り上げにつながる見込み。中国始め東アジア地域の売上高は前年同期比、やや減程度のレベルを確保した。
- 当社の方針、顧客の近くに開発・生産・販売拠点を置くことで、直接やテレワークによるコンタクトが奏功。
- スマートフォンは、中国系の売上計上。カメラレンズが堅調。IoT・LEDも売り上げ確保。受注は北米スマートフォンメーカーに加え、中国系も堅調。カメラレンズ・IoTも底堅い。
- 2019年4Q以降、受注動向は右肩上がりだったが、足元は潜在的な装置需要は根強いものの、様子見傾向あり。コロナの影響は2Qに出る可能性あり。

【業績比較】

(百万円)

【分野別売上高】

	2019年12月期 1Q	2020年12月期 1Q	前年同期比
売上高	13,975	6,837	△51.1%
営業利益	4,126	1,615	△60.9%
(営業利益率)	29.5	23.6	—
経常利益	4,110	1,816	△55.8%
親会社株主に 帰属する 四半期純利益	3,605	1,445	△59.9%
研究開発費	739	701	△5.2%



当社の2020年度の売上はウエイトが後半にあり、受注は前半にウエイトを置くということで計画を作ってスタートしました。第1四半期は、ほぼ当初の計画に沿った結果となっております。

売上につきましては、前年同期に比べますと大きく落ち込み、利益も落ち込んでいます。決算ハイライトの2番目に記載しておりますが、北米スマートフォンメーカーの売上が前年度の第2四半期でほぼ実質的に終了し、その後受注の時期に入っています。前年度第4四半期、当第1四半期と受注を獲得していますが、売上は出ておりません。これが大きく影響して、第1四半期については売上が大きく落ちました。

ただし、北米以外の売上を見ると、この第1四半期でも前年同期と比べてそれほど大きな落ち込みにはなっておらず、若干の減少になっており、その結果が第1四半期の売上高の結果として出ています。

新型コロナについては、すでに当社は台湾・上海の工場では、完全なフル稼働の操業状態に入っています。特に上海がフル稼働の操業状態で、かつ出荷についても、この1カ月はフル稼働操業時の出荷台数と全く同じ台数を出荷しています。

当社の場合、新型コロナの影響は特に受注面に出ています。販売面では前述のとおりでしたが、受注については、直接の訪問ができないということがありました。ただし、テレワーク、電話、メール等のコンタクトで、特にお客様の近くの上海、台湾の拠点を置いているメリットがかなり出ました。出張ができず本社からのアシストには影響がありましたが、上海、台湾ではそれぞれお客様の近くでコンタクトできたということで、受注活

動についても一定程度の影響はありましたが、非常に大きな影響ということはありませんでした。

第1四半期は分野別に見ますと、スマートフォンは中国系の売上を主に計上して堅調でした。それから、カメラレンズは最近になって品質向上ということで赤外線を使い始めたり、広角レンズを使い始めたりしていますので、その需要がかなり堅調でした。それ以外にIoTやLEDについても売上を確保いたしました。

受注に関しては、前述のように北米スマートフォンメーカーの受注は去年12月から始まり、第1四半期も引き続き受注が取れております。スマホの受注に関しては中国系からも話はあります。ただし正式な受注というところでは、実際に直接コンタクトができていませんでした。当社の場合は特に2月、3月は実質的には直接面談ができない状況で、面談ができるようになったのは4月に入ってからで、まだ1カ月ぐらいしか経っていません。そういう意味では、受注に関してはかなり遅れが出ていることは確かです。カメラレンズ、IoTについてもスマホと同様な状況です。発注意欲はかなり強いものは感じていますが、直接会って面談での受注活動が、まだ実際に中国市場が回復してきてから1カ月も経っていないので、契約ベースでの受注という点では、遅れているという状況です。

受注は前年度第4四半期から右肩上がりになっており、当第1四半期もそれが継続した結果になりました。ただし、今申し上げたように過去1カ月ぐらいで受注活動が実質的に再開されたので、これは第2四半期のとりわけ4月については、かなりペースダウンするだろうという予想はしています。

売上高 (2020・1Q)



<2020年・1Q売上高>

- 売上の5割蒸着装置、4割がスパッタ装置。
- スマートフォンでは、非北米系メーカーで筐体バックガラス（加飾膜）・カメラモジュール向けの売上確保。
- カメラレンズでは、監視カメラ向けや一眼レフカメラ向けで売上確保。
- IoT分野では、車載・生体認証・半導体・光通信等で売上確保。

3

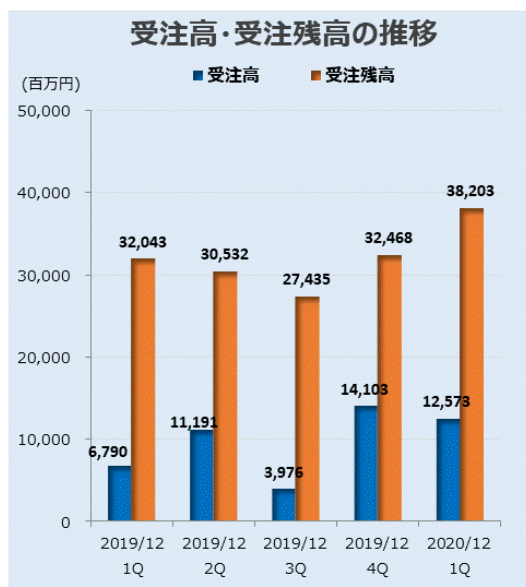
次に売上高ですが、売上の5割は蒸着装置、4割がスパッタ装置となっています。蒸着装置の比率が上がりましたが、この1年半近く原価率改善の努力をいろいろしており、設計の見直しや大量に発注することでの価格の値引きなどを交渉してまいりましたので、この辺がかなり功を奏しており、蒸着装置の比率アップが必ずしも利益率の低下ということにはなっていません。

スマホでは非北米系メーカーで筐体バックガラス、カメラモジュール向けの売上が出ています。とりわけカメラモジュールにつきましては、当社では北米系の売がありませんので、中国系が中心ですが、カメラのカバーガラスにAR膜を付けるようなカメラモジュール向けの売上が出ています。

カメラレンズでは監視カメラ向け、一眼レフカメラ向けです。とりわけ監視カメラについては、前述の通り品質アップというのが最近の傾向で、赤外線を使うとか広角レンズを使うようになり、この辺では当社の技術が非常に強いということで売上が上がっています。

IoT分野では車載、生体認証、半導体、光通信で、それぞれ売上を確保しています。今後の当社の事業分野の拡大を示唆するような売上がIoT関係では出ています。

受注高・受注残高 (2020・1Q)



<2020年・1Q受注高>

- 受注は北米スマートフォンメーカーから新規受注を獲得。
- 中国系からも受注獲得。
- スマホ関連のカメラ機能の高機能化・加飾向けが好調。
- 新型装置ではスパッタ新型、両面スパッタ、光通信、LEDで受注を確保。
- 新技術や高機能成膜ニーズは根強く、需要のリバウンドに対応できるよう、生産体制を整備。

4

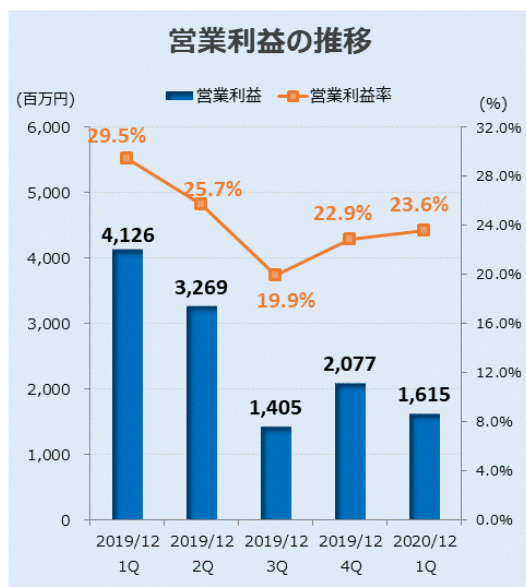
次に受注ですが、ご覧のような図のとおりです。前年度第4四半期から始まりました北米系のスマホ受注に加えて、中国系からもスマホ関連は受注を獲得しています。

スマホ関連はカメラモジュールの高機能化が、当社の受注につながっています。

今年度は本格的に新型装置の受注につなげるように努力をしています。第1四半期の受注では、カメラモジュールに3D機能を付けるためのスパッタの新型や、指紋認証用の両面スパッタ装置、それから5G対応の光通信用蒸着装置、LEDの装置、こういったものが第1四半期では受注が取れています。ただし、この新型装置については、率直に申し上げて、まだ受注が本格化したというところまでは行っていません。

これ以外にもALD装置等で、すでにお客さまにも、正式な受注という形ではないですが、納入をして現場で試作をしているものがあります。こういうものが本格的に受注できるように、現在最終的な詰めを行っているところです。

営業利益 (2020・1Q)



<2020年・1Q営業利益>

- 営業利益率は23.6%
- 原価率は前四半期同水準 (+0.3%)
- 生産効率改善、部材調達コスト削減努力が奏功。
- 販管費は12億円 (前四半期比、△5億円、△1%)。
・販管費額減少は、研究開発費、支払手数料等減による。

5

5 ページは営業利益です。営業利益率は 23.6% となっています。

原価率に関しては、当第 1 四半期は前年度第 4 四半期やその前の四半期と比べて、あまり大きな変動はありません。

装置の原価率がやや下がっています。原価率を下げるための努力が功を奏して装置の原価率は下がっています。ただし、部品・サービスの原価率が、第 1 四半期は 2 パーセント強上がりしましたので、全体の原価率はほぼ横ばいになっているというのが実態です。

販管費率は売上が減って、販売管理費がかなり落ちました。研究開発費は年間で考えるべきですが、当第 1 四半期についてはペースがスローだったこともあり、これも金額的には少なくなっています。

財務の状況



(百万円)

	2019年12月末		2020年3月末		増減額
	金額	構成比	金額	構成比	
流動資産	47,193	83.5%	44,093	82.8%	△3,100
現金・預金	26,969	47.7%	24,609	46.2%	△2,360
受取手形・売掛金	4,252	7.5%	3,075	5.8%	△1,177
棚卸資産	15,173	26.9%	15,733	29.6%	+560
貸倒引当金	△350	△0.6%	△328	△0.6%	+21
その他	1,148	2.0%	1,004	1.9%	△144
固定資産	9,315	16.5%	9,134	17.2%	△181
資産合計	56,509	100.0%	53,227	100.0%	△3,281
流動負債	19,825	35.1%	18,359	34.5%	△1,465
支払手形・買掛金	2,735	4.8%	3,333	6.3%	+598
短期有利子負債	510	0.9%	488	0.9%	△21
未払法人税	545	1.0%	245	0.5%	△299
前受金	13,988	24.8%	12,386	23.3%	△1,601
その他	2,046	3.6%	1,904	3.6%	△141
固定負債	1,864	3.3%	1,706	3.2%	△157
長期有利子負債	165	0.3%	142	0.3%	△22
その他	1,699	3.0%	1,564	2.9%	△134
負債合計	21,689	38.4%	20,066	37.7%	△1,623
純資産合計	34,819	61.6%	33,161	62.3%	△1,658
負債純資産合計	56,509	100.0%	53,227	100.0%	△3,281

・配当金支払いにより、現金・預金が減少

・売上計上により、前受金が減少

・配当金支払いにより、純資産が減少

6

6 ページは財務の状況です。財務は端的に申し上げますと、配当金の支払いが当第1四半期にありましたので、現金・預金が減少して、純資産も減少しました。その他では売上は計上が進みましたので、前受金が減少しています。

業績見通し



2020年度業績見通しは当面、据え置きとします。
新型コロナウイルス鎮静化の目途が見えた時点で検討し、修正が必要な場合は開示いたします。

	2019年12月期 実績	2020年12月期 予想	
			前期比
売上高	42,822	46,200	+7.9%
営業利益	10,879	12,000	+10.3%
(営業利益率)	(25.4%)	(26.0%)	—
経常利益	11,031	12,000	+8.8%
親会社株主に帰属する 当期純利益	9,101	9,200	+1.1%
研究開発費	3,172	3,300	+4.0%

7

業績見通しですが、2020年度の業績見通しは、売上高 462 億円、当期純利益が 92 億円ということ現段階では変更をしていません。4月からの第2四半期を見て、どのくらいのレベルで着地できるかという見通しがつけば、ある程度年間の業績見通しができます。ただ現段階では少し早過ぎて、まだ5月、6月がよく見通せません。

一方で、市場の潜在的なニーズは強い感じは持っています。他方では、新型コロナからの回復はまだ完全ではないことや、米中の貿易摩擦がどれだけ再発するのか分かりません。これからの影響を見極めるのにもう少し時間がかかるでしょう。V字回復をすれば計画は変更する必要はなくなります。そうでなくて、この第1四半期のような売上の状況が続くと、計画は修正しなくてははいけません。もう少し時間が経ちそれらを見通せるようになってから、計画については検討したいということで、現段階では特に業績見通しを変えないことにしております。

私からの第1四半期に関するご説明は以上です。

免責事項・注意事項ならびにお問合せ先



当資料に記載された内容は、2020年5月11日現在において一般的に認識されている経済・社会等の情勢および当社が合理的と判断した一定の前提に基づいて作成されておりますが、経営環境の変化等の事由により、予告なしに変更される可能性があります。

本発表において提供される資料ならびに情報は、いわゆる「見通し情報」(forward-looking statements) を含みます。これらは、現在における見込み、予測およびリスクを伴う想定に基づくものであり、実質的にこれらの記述とは異なる結果を招き得る不確実性を含んでおります。

それらリスクや不確実性には、一般的な業界ならびに市場の状況、金利、通貨為替変動といった一般的な国内および国際的な経済状況が含まれます。

今後、新しい情報・将来の出来事等があった場合であっても、当社は、本発表に含まれる「見通し情報」の更新・修正をおこなう義務を負うものではありません。

【お問合せ先】

E-mail : ir-info@optorun.co.jp

TEL : 03-6635-9487